

Enjoying SKYFALL. Reporting
for duty.

sanukisoba

アクション映画としてはやはりB級と言わざるを得ないと思う。

見え見えの伏線、中途半端なプロット、回収されない伏線、深さのないプロット。

どれをとってもB級なのです。

007はB級たるべし、という命題を頑に守っているのだとすれば何も問題はないでしょう。

007であればね。

本作は僕みたいなジュディ・デンチのファンだったら楽しめたと思う。

そう言っても良いくらいに「スピンオフ」感の強い作品だった。

ジュディ・デンチのファンムービーだと言った方が適切かもしれない。

そう、この作品はbond作品とはちょっと言いにくいのだ。

この話をする前に、どうしてもさけて通れないのが「007って、どんな映画？」という命題だ。

これはなかなか難しい。

ハードボイルド

という人もいれば

酒・女・拳銃

という人もいるだろうし

ハードボイルドとは酒・女・拳銃に他ならない

という横やりを入れる人もいるだろう。

007かくあるべしというのはそれこそ千差万別なのだ。

でも、あえて僕はこう言いたい。

「光って、音が鳴って、動けば、007だ」

と。

「光って、音が鳴って、動く」

これが何かというと、端的に言い換えれば「ギミック」であり「はったり」だ。

世間の男子の大多数はこうしたギミックやはたりにとても弱い。

限定品に弱かったり新製品に弱かったりするの結局は根底にこうしたギミックやハタリへの耐性がないからこそその帰結なのである。

あなたが男性なら胸に手を当てて考えてみてほしいし、あなたが女性ならあなたの周りの男性を思い浮かべてみてほしい。彼らは光って音が鳴って動くものに弱くはないだろうか？

車であったりライターであったり携帯をはじめとするガジェットであったりPCであったり。彼らは光って音が鳴って動くものに弱い。抗えない。

極端に言えばそれが男子の、オトコノコの憧憬であり、夢なのだ。いくつになっても。

007ってのはそれ自体が「光って、音が鳴って、動く」モノだと僕は思っている。

派手なアクション、炸裂する火薬、光とともに排出される薬莢。

光を受けて浮かび上がる綺麗な肢体、漏れる吐息、切なげに動かされる腰。

腕時計に仕込まれたレーザー、焼き切られるドア、崩落する建物。

疾走するスポーツカー、轟音とともに飛び出るミサイル、炎上するトラック。

登場人物、主人公、登場するギア、すべてが「光って、音が鳴って、動く」。すべてがオトコノコの憧憬なのだ。

大人の女性に鼻で笑われても、子供みたいと言われても、現実的でなくても、必要性が全くなくても。それでも僕らは007に心惹かれてしまう。それはきっと僕らがオトコノコをやめられないから難じゃないかな、というのが持論だ。

そう、現実的でないどころか、必要性なんて全くない。

なぜ、テープレコーダーをカメラに偽装する必要があるのか。

なぜ体内でなく靴底に発信器を忍ばせる必要があるのか。

冷静に考えればバカバカしい設定だ。何も光らせたり音を鳴らさせたり動かしたりする必要なんてどこにもないのにそういうギミックを与えることがとても多い。

なのに、どこか心がときめく。細かいことはいらぬ。現実もいらぬ。小賢しい理屈もいらぬ。王道であればそれで良い。そんな強引さが007にはあるんだ。

そう、王道。

王道。

さて。ゴールドフィンガーという名作が007シリーズにはある。

『From Russia With Love』ではないのかって？たしかに『ロシアより〜』は映画としてはなかなか名作だ。映画としては。でも、007という枠組みの中ではゴールドフィンガーこそがベストだ。

ゴールドフィンガーのあらすじはまあWikipedia師匠にでも教わっていただくとして、ここではオッドジョブの話をしてみたい。

ゴールドフィンガーに出てくる悪の親玉の優秀なボディガード、オッドジョブ。

彼は口がきけない。いや、言葉をしゃべれないだけなのかもしれない。いずれにせよ、彼の口から言葉は出てこない。

そして彼は、いつも笑顔である。不適でありながらふてぶてしさのない、とても愛想のいい笑顔だ。きっと、近所のスーパーにいたら人気者になるであろうくらいの笑顔。でも彼はボディガード。鍛え抜かれたタフな肉体。木材で殴られてもビクともしない体はキレのある動きをしながら的確な攻撃を007に繰り返す。それだけじゃない。彼には必殺の武器がある。鍛え抜かれた体をもつオッドジョブをして相棒に選ばしめる武器、それは帽子。オッドジョブがいつも身につけている何の変哲もない帽子こそが彼の武器。

ニヤリとオッドジョブが微笑み、帽子を手取る。コンパクトな動作でフリスビーのようにオッドジョブが帽子を飛ばす。帽子の向かう先には石像が。石像に向かって一直線にのびていく帽子。

どうになってしまうのか、と観客が見守る中、帽子が石像とコンタクトする。次の瞬間、石像は真っ二つに切断され、帽子は彼方へと飛んでいく。

彼の帽子はツバの部分に円形の刃が仕込まれており、驚いたことにその帽子は暗器だったのだ。石像をも切断するその武器を手、オッドジョブは007と対峙する。

いや、わかる。わかるよ。冷静に考えたら非常にバカバカしい武器だ。というか、そもそも原理的に考えられない。そんな武器、武器として機能するとも思えない。

でも、これは残念なことに「光って、動いて、音が鳴る」。鈍く光る刃と、目標に向かって一直線にのびる軌道。そして「ヒュルヒュルヒュルヒュル」という効果的なSE。言ったでしょう？現実的であるかなんて、光と音と動きという王道の前ではすべてが野暮なのだ。

さらに言うのであれば、このオッドジョブ、007と対決したときもなかなかすてきな王道っぷりを発揮する。

007が彼に打撃をくわえる。しかし彼は微動だにせず、防御は愚か腕を動かすこともせず、攻撃してくる007を見てニヤリと笑うだけである。それを見て焦りの表情を浮かべる007。

観客は最終的に007が勝つことなんて知っている。強い敵が出てきて、主人公が苦戦して、最終的に勝ちをおさめる。そんなの王道すぎてもはや使うことすら恥ずかしいくらいのベタさだ。でも、見ている観客は焦りの表情を浮かべた007を見て手に汗を握る。

「007、危うし！」
と。

結局オッドジョブは機転を利かせた007の攻撃で敗れるわけだが（当然だ）、勝敗が決した瞬間観客は安堵するのだ。

こんな王道ほかにありますか？

いや、王道はどこにでもある。

こんな王道が許されるだけではなく、求められる映画、ほかにありますか？

王道天国、それが007であり、王道天国ということは言い換えれば様式美の世界でもあって、様式美の世界と言えればそれはまさしく水戸黄門の世界なのである。

スパイ大作戦がメッセージを自動消去するように

印籠が掲げられ、悪人がひれ伏すように

光って動いて音が鳴り、最後に勝つ。

それが007なのだ。

まじめに語っても、冗談半分で語っても、あの世界にちょっとでも憧れているなんて素振りを見せたが最後、周りの人からは「馬鹿じゃないの」と笑われてしまう。

それでも皆を引きつけてやまない、オトコノコのオトコノコによるオトコノコのための王道ファンタジー、それが007だと僕は考えている。

むしろ冷静に考えたときバカバカしければバカバカしいほどその魅力は際立つのだ。

ライバルのオッドジョブやジョーズ、簡単に抱かれる女たち、キザで小粋な言葉たち、そして爆発するギア（道具）。

すべてがバカバカしい。でも、007はそれらがなければ成立しない、壮大なファンタジーなのだ。

だって、ディズニーが現実的だったら楽しめないように、ファンタジーは現実を否定することが何よりも大事なのだから。だから007は現実的な衣装を身にまとった非現実でなければならない。

その点において、今回のスカイフォールは（ようやく本題に戻りました）、007シリーズとして評価することが僕にはできない。

アクション映画としては成り立つのだろうし、たとえそれがB級の出来であったとしても、映画と

しては成立している。まじめに。リアリティに配慮したすてきな映画だ。
そしてその分、007ではなくなっていくのだ。どうしようもないまでに。

ダニエルクレイグは格好いい。プーチンに似ているが、プーチン自体がハンサムなのでそんなことは問題ではない。

スーツの着こなしも素敵だし、衣装や振る舞いに関してはピアーズ・ブロスナン時代の007のスタッフが全員打首にあったのではないかと思わせるくらいにスマートなものに昇華されている。ショーン・コネリーのような軽佻浮薄さもなければ、ティモシー・ダルトンのような上流階級出身を思わせるエレガンスもないけれど、若くて、何かを得ようとしている刺々しい発育途上の青年的な魅力がそこにはある。これは間違いなく格好いい。

でも、残念ながら007らしさはこの映画にはない。主人公のキャラクターが俳優ごとに少しずつちがっていながらも、007はやはり007であり続けたことからわかるように、このシリーズの遺伝子はもっと上位の概念として、もしくは通底するベースコードとして、受け継がれていた。でも、残念ながら、スカイフォールにおいてその遺伝子は完全に欠失してしまった。

王道を王道として掲げることが、もはやできない世の中になってしまったのかもしれない。

王道を王道として喜んでいたのは007のファンだけであって、裾野を拡大するためには突然変異が必要なだろうな、ということはわかる。

それは007ファンとしては必要性がわかるけれども、できるならやらないでにおいてほしかったことでもある。

だって必要性なんてものから遠くかけ離れたところで007とファンの僕らは生きてきたんじゃないですか、と。

007として、スカイフォールを語ることは難しい。

でもアクション映画としてスカイフォールを語ることならいくらでもできそうである。

ただ、それをやりたいと思えるかどうか、という話は避けて通れない。

ファンの間でも賛否両論わかれるスカイフォールだけど、僕はこれをジュディ・デンチのファンムービーだと認識しているし、それが感想のすべてであって、ジュディ・デンチの魅力を再確認して劇場を出てきた。

もちろん、この作品が007シリーズの中で最高だと言う人がいたって僕はその人を007のファンとして認めない！なんて言ったりはしない。

今後のシリーズがどういう流れになるか、楽しみではあるけどね。ダニエル・クレイグ可愛いし。

ただね、この映画、007シリーズとは思えないくらい大ヒットして、今まで007に興味のなかった人に足を運ばせたのは事実。

するとどうしても出てくるのが「サブカル系住民」。

この人たちの悪いところって、知ったかぶりやどっかで聞いた知識をあたかも専門家のような顔で語るところよね。

どっかの映画批評家が「スカイフォールはゴールドフィンガーを見てから行くべき」と言ったのを金科玉条として「ゴールドフィンガーへのオマージュがー」とか「ゴールドフィンガー見てない人にはわからない映画」とか色々語ってるのを見ると小蠅にしか見えないのよ。

あのね、僕だって専門家ヅラしてこんな風に偉そうに007語っちゃって、馬鹿っぽく見えるなあと自覚しているんだけど、ただね、スカイフォールがゴールドフィンガーへのオマージュに満ちているとか言う前にまず「消されたライセンス」見たら？とそれなりに007を勉強しているつもりの僕は思うんだ。

これは蛇足でした。はい。